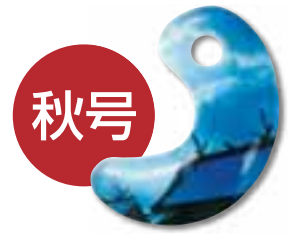


島根県立
古代出雲歴史博物館
NEWS

2010.sep vol. 15



CONTENTS

- 2・3 企画展「神々のすがた」特集
- 4 博物館だより
- 5 学芸員通信
- 6 トピックス
- 7 山陰歴史回廊
- 8 企画展スケジュール

2010年
10月8日 金
— 11月28日 日



古代から水木しげるまで

企画展
神々のすがた

秋の企画展

島根県立古代出雲歴史博物館・石見美術館連携事業 古事記1300年

神々のすがた

古代から水木しげるまで



「子どもの頃、ぼくは漠然と「鳥取」と「島根」は違うと感じていた。地理的に近くても雰囲気まるっきり違うのだ…目に見えない神々が寄ってきているようなのだ。

島根の人々には、出雲の神々の雰囲気が漂う…ぼくはベビィの頃から、島根県人という、凡て神につかえている人だと思っていた。」

水木しげる氏が自伝『神秘家水木しげる伝』でこのように感じるように、島根県は様々な神話や伝説を今に伝えています。

とりわけ小泉八雲が「神々の国」と形容した杵築（出雲市大社町）には出雲大社があり、『日本書紀』によれば、祭神の大己貴命は、「顕露」（目に見える世界）を皇孫に譲りささげられたかわりに、「神事・幽事」（目に見えない神の世界のものごと）を治められることになった、といい伝えられています。

古来日本人は、神々は目に見えない世界にあり、我々の目には見えない存在と考え、古くから心の中でとらえた神々のすがたを形にあらわすうえで、様々に模索を繰り返してきたのでした。

古事記編纂1300年を前に、当館と島根県立石見美術館では秋の企画展「神々のすがた」を開催します。当館では、神々のすがたの系譜をたどる「古代から水木しげるまで」（総点数113件147点。会期中、絵画と能面は展示替えあり）、石見美術館では、近代美術で古事記の名場面をたどる「古事記と近代美術」と題して、それぞれ歴史・美術の視点から日本人の神々に対する思いを探ります。



目玉おやじ
©水木プロダクション

古事記と近代美術

- 1、近代日本画にみる神々のすがた
—前賢故実から再興院展の画家たちへ—
- 2、近代洋画にみる神々のすがた
—リアルに描かれた違和感のある神々—
- 3、版画にみる神々のすがた
—庶民に広められた神々のイメージ—
- 4、彫刻にみる神々のすがた
—神の御霊は木にやどる—
- 5、神域—見えないけれど、神々しい—

9月17日[金] ▶ 11月7日[日]

10:00~18:30 (入場は18:00まで)

■休館日：毎週火曜日

■観覧料 (円)	企画展のみ	セット券	前売券
一般	1,000(800)	1,150(920)	900
大学生	600(450)	700(530)	500
小中高	300(250)	300(250)	200

主催：島根県立石見美術館、財団法人島根県文化振興財団、山陰中央テレビジョン放送株式会社、中国新聞社

石見美術館

〒698-0022 島根県益田市有明町5-15
TEL：0856-31-1860 FAX：0856-31-1884
<http://www.grandoit.jp/museum/>

古代から水木しげるまで

- I 現代の神々のイメージ
- II 目に見えぬ神
- III 顕現する神
- IV 多様化する神
- V 英雄神・スサノオ
- VI 現代に生きる神
- VII 神を継承する

10月8日[金] ▶ 11月28日[日]

10月まで→ 9:00~18:00 (入場は17:30まで)
11月から→ 9:00~17:00 (入場は16:30まで)

■休館日：毎月第3火曜日

■観覧料 (円)

	企画展のみ	セット券	前売券
一般	700(560)	1,000(800)	企画展一般 550
大学生	400(320)	600(480)	セット券一般 800
小・中・高	200(160)	300(240)	

主催：島根県立古代出雲歴史博物館、島根県古代文化センター、日本海テレビ

古代出雲歴史博物館

〒698-0022 島根県出雲市大社町杵築東99-4
TEL：0853-53-8600 FAX：0853-53-5350
<http://www.izm.ed.jp/>

I. 現代の神々のイメージ

髪をみずらに結った古代の豪族の姿で表わすのは、明治20年代以降に確立した神のイメージなのでした。

II. 目に見えぬ神

古代、神は特定の山、木、磐や人などに降臨し、神意を託宣するとされました。

神が示現する場（斎庭）や神器を通じて、古代人の神観念を探ります。

□主な展示品

遮光器土器（青森県亀ヶ岡遺跡出土）／明治大学博物館 銅鐸（加茂岩倉遺跡出土29号鐸）／文化庁〔国宝〕ほか



線刻絵画付土器
（岡山県足守川A遺跡出土）
岡山県教育委員会蔵
岡山県古代吉備文化財センター保管

III. 顕現する神

仏教が伝来すると、仏像は当初「異国の神」と受けとめられ、8世紀にはいると、神々を神像や絵画で表現するようになりました。

また神の正体と捉える「本地垂迹」、神こそ仏の本質とする「神本仏迹」など神仏習合思想が広く流布しました。

□主な展示品

木造摩多羅神坐像／安来市・清水寺（新発見資料）
日吉山王宮曼荼羅図／奈良国立博物館〔重要文化財〕ほか



木造男神坐像
京都 松尾大社蔵
重要文化財

IV. 多様化する神

中世後期になると福神が庶民の信仰を集め、神能や神楽で神が演じられるようになり、近世には儒学や国学の進展により、髪型や装束の考証が行われるようになりました。

また、神々は身近な存在として錦絵や風刺画に登場するようになりました。

□主な展示品

茶吉尼天曼荼羅／大阪市立美術館
七生舞之図／国立歴史民俗博物館ほか



六大黒曼荼羅
当館蔵

V. 英雄神・スサノオ

日本神話を代表する英雄神・スサノオ。荒ぶる神威から中世には疫神を祓う牛頭天王と習合し、また勇猛な神として今にいたるまで信仰を集めています。

□主な展示品

木造牛頭天王坐像
／出雲市・鰐淵寺
天淵八叉大蛇記
／松江市・高野宮（内神社）ほか



桐生祇園祭四丁目鉦（桐生八木節まつり）
松本喜三郎 生人形 素戔鳴尊
桐生市本町四丁目自治会蔵

VI. 現代に生きる神

「純粋な太古からの精霊信仰…それは宗教の前段階としてのアニミズムとか、そういったものとは違う、本当のあるべき宗教としての“草木虫魚教（アニミズム）”なのだ。」精霊とは何かを長年にわたって問い続ける水木しげるが捉えた神々の姿とは？

□主な展示品

原画：焼火権現／瘡瘡神／貧乏神／既神／根の国ほか



水木しげる 大元神 ©水木プロダクション

VII. 神を継承する

神を舞い、神に捧げ、神と人々が共に楽しむ神楽。

地域共同体の崩壊の危機の中で、中国地方の神楽社中は地域の人と土地との絆を守り続け、絶えず模索しています。

神楽を通じて神の姿を継承する人々の姿を映像で紹介し

■紹介映像

大社／佐陀神能保存会
ドキュメント「神を舞う 温泉津プロジェクト—若者たちの新たな挑戦—」／石見神楽温泉津舞子連中・京都造形芸術大学瓜生山舞子連中



温泉津舞子連中と瓜生山舞子連中の練習風景

■第10回神在月古代文化シンポジウム

「神々の姿の変遷を考える」

基調講演「神仏習合と神像」長坂一郎（東北芸術工科大学美術史・文化財保存修復学科教授）

問題提起①「絵画に描かれた神々と霊地」藤原重雄（東京大学史料編纂所助教）

問題提起②「神像の出現—神像とは何か—」浅湫 毅（京都国立博物館 主任研究員）

パネルディスカッション コーディネーター：岡 宏三（当館専門学芸員）

●日時：10月31日(日) 13:00～17:00

●場所：大社文化プレイスうらら館 だんだんホール（出雲市大社町軒築南1338-9）

主催／島根県古代文化センター・島根県立古代出雲歴史博物館

共催／出雲市・神話のふるさと「島根」推進協議会

■連続講座

第1回「出雲の摩多羅神」（仮称）

山本ひろ子（和光大学表現学部総合文化学学科教授）

●日時：10月30日(土) 13:30～15:00

第2回「文化と暮らしの中に根付く神々—神道美術の魅力—」

長谷洋一（関西大学文学部総合人文学科教授）

●日時：11月13日(土) 13:30～15:00

関連企画

■ワークショップ

◆木彫教室「神様を彫ってみよう」

川島康史（仏師・木彫家）

●参加料、事前申し込みが必要です。日程等、詳しくはお問い合わせ下さい。

◆「神楽面絵付け体験」

小林泰三（神楽面工房「小林工房」・石見神楽温泉津舞子連中副代表）

●日時：10月16日(土)・11月7日(日)
各13:30～16:00

●料金：材料費1,000円＋企画展観覧料

●定員：20名

※関連企画のお問合せは、古代出雲歴史博物館へ
TEL 0853-53-8600

BATADEN～一畑電車百年ものがたり～

島根県教育庁文化財課企画員 品川 知彦

多くの方々の資料提供を受けて開催したこの展示。およそ22,000人の来館者を迎え、場内では「懐かしい」といった声があちこちから聞かれました。その懐かしい展示資料の中でも、一層の注目を集めたのは「楽しいかわいい夢の国」、一畑パークでした。一畑パークは昭和36年（1961）から昭和54年（1979）まで、旧平田市の一畑山にあった動物園を併設した遊園地。当時、家族や地域の旅行といえば一畑パーク。また一畑薬師の二歳児詣りなどを兼ねて訪れた方も多かったようです。会場では「一畑パークへ行きたいな」から始まるCM映像、開館当初頃の映像、130枚を超える家族写真などを展示していましたが、CMにあわせて口ずさむ方や、「怖かった」という印象の強い「ビックリハウス」、猿が車掌役？をしていた「お猿の電車」などについて見知らぬ人同士でそれぞれの思い出を語り合っている姿をよくみかけました。また、一畑パークを知らない世代にそのすばらしさを伝えている姿もありました。一人ひとりの思い出を紡ぎ出しながら、それを後世に伝えていく役割が不十分ながら果たせた気がします。

古代出雲歴史博物館が近現代の生活を中心とした特別展を開催するのは初めてで、いわば冒険だったのですが、展示が来館者の方々の共感を得ながら、来館者自身が解説者となり得る展示を今後も機会を捉えながら実施していきたいと思えます。



展示のひとつ

特別展「BATADEN～一畑電車百年ものがたり～」関連イベント バスハイクツアー

夢の軌跡をたどる

交流企画員 福代 亜寿男

廃線跡をたどり、そこに残された鉄道遺構を目にすると、いろいろなものが見えてきます。鉄道にかけた先人たちの夢や情熱、そして人々がその鉄道と共に生きた時代の空気感など、そんなものが鮮明に浮かび上がってきます。

そんな廃線跡も宅地化や道路の拡幅などによって、多くの遺構が姿を消しています。そんな中、今回訪れた「一畑電鉄立久恵線」は、廃線後45年が経過しているにもかかわらず、実に多くの遺構が残っています。中には全国的にみても貴重な素堀の鉄道トンネルである「立岩トンネル」のようなものもあります。近年、近代化遺産として代表的な鉄道施設が登録されていますが、この人知れずたずむ「立岩トンネル」をはじめとする「一畑電鉄立久恵線」の遺構をはじめ、全国に残るすべての廃線跡も、その価値は勝る事はあっても、劣るものではありません。



素堀りの「立岩トンネル」。真上を山陰道のトンネルが通り、新旧同居している姿がおもしろい。

イギリスの歴史学者アーノルド・J・トインビーは「人類の歴史の奇跡の一つは、日本の明治以降の近代化である」と述べました。それを支えていたのが明治5年（1872）新橋～横浜間に日本で初めて鉄道が開業してから、わずか30年で7,000kmを越えた鉄道網だったのです。これら鉄道遺構を近代化の証「鉄道文化財」として後世に伝えられるかどうかは、その地域の事情よるところも大きく、保存するのは難しいのが現状です。それでもできる事なら、少しでも長い時間この貴重な廃線跡や鉄道遺構を残してもらいたいと思います。

廃線跡、それは先人たちが描いた近代化への「夢の軌跡」なのです。みなさまも一度、「夢の軌跡」廃線跡をたどってみてはいかがでしょうか。そして機会がありましたら、みなさまと一緒に「夢の軌跡」をたどりしたいと思います。

特別展示 出雲平野の弥生時代

— 調査研究成果の最前線 —

専門学芸員 平石 充

島根県内では、毎年どれくらいの発掘調査が行われているかご存じでしょうか。平成21年度についてみると12月28日までに市町村の教育委員会ほか45件の発掘調査を、県教育委員会が41件の発掘調査を計画実施しています。一頃よりは少なくなったとはいえ、実に多くの遺跡の調査が日々県内で行われているとあってよいでしょう。

本展示は、このように日頃行われている埋蔵文化財の発掘調査成果を、時代・地域を限って、まとまったかたちで紹介する展示の第2弾です。

今回の対象となるのは、弥生時代の出雲平野です。出雲平野は県内最大の平野で、現在は南側を中心に市街化が進んでいますが、かつては、『出雲国風土記』に神門水海と記されている汽水湖が存在する低湿な土地でした。弥生時代はまさに人々が山裾から平野部にしだいに移住していった時代に当たります。そして、弥生時代の後半には、神門水海域をのぞいた平地部に大規模な集落がいくつも展開していたことが、出雲市内の発掘調査ではっきりと解ってきました。

実際に遺跡の発掘調査を実施してみて、まず我々調査員が驚かされたのが、大きな溝に捨てられた、多数の土器です。これらの土器には、完全な形のものも多く含まれており、必ずしも壊れたものを捨てたとは限らないようです。土器の年代は弥生時代末～古墳時代前期のものですが、このような大量に土器を捨てるようすは、市内各地の遺跡で確認されています。今回はその一部ですが、古志本郷遺跡の溝から見つかった土器をまとめて展示してみたいと思います。これらの土器がどうして捨てられなければならなかったのか、これは出雲の弥生時代的な社会の終わりを考える上で、大きな問題であり、展示するナマの資料を通して、皆さんも是非このナゾを考えてみてください。

このほか、弥生時代後半には、出雲平野と九州など遠隔他地域との交流が活発になり、各種の手工業生産も平野のなかでおこなわれるようになり、出雲平野は山陰地方でも随一の交易港になっていったと考えられます。この時代には社会の大変革があったのです。出雲平野からの多くの出土品を展示する今回の特集展で、是非この激動の時代を体感してみてください。



古志本郷遺跡 大溝出土の土器



古志本郷遺跡 大溝からの土器出土状況

「浪漫バス」出雲を駆ける

— 神話のふるさと 出雲の博物館めぐり —

主任学芸員 久保田 一郎

358本の銅剣で日本中に衝撃を与えた荒神谷遺跡。銅鐸の同時発見日本最多記録（39個）で知られ、考古・古代史ファン9,000人が現地説明会へ押し寄せた加茂岩倉遺跡。そして弥生後期の「王墓」西谷墳墓群。いずれも最寄りの駅・バス停から歩いて何十分、何時間……という、交通の不便さに泣いています。これらの遺跡を結びつける「足」として、浪漫バスは出発しました。

古代出雲歴史博物館では、昼食を含めた長い自由見学時間が取っております。「大社コーナー」ではなじみ深いえびす様・大黒様や、出雲大社の巨大な模型の前で皆さんの足が止まりました。

午後最初の見学地は、今年の春開館したばかりの「出雲弥生の森博物館」です。「来館した子どもが楽しく遊べる空間」をめざしたという1階正面「たいけんコーナー」では、弥生服を着たり、砂場に入って物を「発掘」したり、「接合」＝土器（強力磁石入り）の立体ジグソーパズルを楽しめます。すぐ隣の遺物整理室では、ほんとうの「接合」作業も行われていて、埋蔵文化財調査のプロの仕事ぶりをガラス越しに見学できます。2階の常設展示室では、圧倒的な存在感の「西谷3号墓」復元模型が部屋の真ん中を占めます。墓を作る人、「王」の葬儀に参加する人など、多くの人物模型は、出身地ごとに服の色や入れ墨まで違うというこだわりようです。



「たいけんコーナー」にはお楽しみがいっぱい



西谷3号墓の頂上に立つ

博物館に隣接するほんものの「西谷3号墓」にも登ってみました。以前館長さんが、「サプライズがありますので、ぜひ」と言っていた「2号墓」に入ると、墓のあるじのなきがらが幻灯のように浮かび上がり、「おおっ」「おおっ」とどよめきがあがりました。

次は荒神谷博物館です。短い時間の中で、学芸員さんが時間を取って見せてくれたのは、「横からみた銅矛」で



荒神谷の現地をのぞむ



きれいな遊歩道がついた加茂岩倉遺跡

最後は銅鐸39個同時発見の加茂岩倉遺跡です。14年前の現地説明会のときは、山の斜面に急ごしらえされた急な階段をのぼって現地に着いたものでした。今ではガイダンス施設から傾斜の少ない遊歩道がついていて、車いすを使ってでも現地へ行けるようになりました。

古代出雲を感じる4つのスポットをかけめぐった今日の旅。4カ所がそれぞれに个性的で、飽きることなく、あっという間に過ぎてしまった一日でした。

● 出雲の青銅器に関する発見記念日 ●

- 7月12日『銅剣記念日』 1984年7月12日、斐川荒神谷から全国最多の銅剣が発見されました。
- 7月19日『荒神谷銅鐸出土』 1985年同じ荒神谷銅剣出土地から「銅鐸」と「銅矛」も発見されました。今年が、
- 8月16日『荒神谷銅矛出土』 「発見25周年」となります。
- 8月19日『加茂神原遺跡銅鏡出土』・9月13日『真名井遺跡銅戈』
- 10月14日『銅鐸記念日』 1996年10月14日、加茂岩倉から全国最多の銅鐸が発見されました。

「さんいんさんぽ」

～水木しげる記念館/鳥取県境市～

当館は、水木しげる81歳の誕生日、平成15年3月8日に開館し、今年で8年目を迎える。JR境港駅から、およそ800メートル続く水木しげるロードの東端にあり、前身は老舗の料亭だった建物。古き良き境港の面影を活かした設計で、外観を白壁の土蔵造りで仕上げている。



外観

【前庭と入口】

前庭の中ほどには、鬼太郎誕生の名シーン、目玉おやじが生まれたばかりの鬼太郎を心配げに見守るブロンズ像があり、来館者に人気の写真スポットだ。館内に一步足を踏み入れると左に大きな絵が目に飛び込んでくる。水木マンガの代表的なキャラクターが一堂に会した大作『妖怪友だち大集合』。鬼太郎、ねずみ男などはもちろんのこと、幼少のころの水木しげるやのんのんばあ、境港の冬の味覚・松葉ガニなど、25にもおよぶキャラクターを描いている。



年表



庭園

【一階】

『げげの間』では、水木の半生を年表に沿って写真と絵、思い出の貴重な品などを展示し、水木の波乱万丈の人生を紹介している。

『のんのんばあとオレ』は、妖怪やこの世とは別の世界があることなどを教えて幼い水木に影響を与えた『のんのんばあ』が語るゾーンだ。幼いころの水木になって、妖怪の不思議さ、奥深さをぜひ体感してほしい。

『妖怪洞窟』には、40体もの妖怪が棲みついている。ライトが効果音をともなって怪しげに瞬き、日常にはない空間を演出している。また『妖怪庭園』は写真撮影OK。庭園の中に12体の妖怪が得意のポーズを決めている。庭園をぬけると等身大の水木しげるが目に入り、その横には氏が壁に直接描いた鬼太郎、ねずみ男、目玉おやじの絵がある。一番人気の写真スポットだ。



水木先生とイラスト

【二階】

階段の壁にも、水木直筆の鬼太郎たちが、ところ狭しと並ぶ。水木が帰郷し、来館するたびに『増えていく壁画』だ。上って最初に目に入るのが、水木が80歳を過ぎてから制作に2年をかけた『妖怪道五十三次』。歌川広重の「東海道五拾参次」をモチーフに描いた力作で、日本橋から京都までの55枚を展示。この中には300もの妖怪が描いてあり、氏の作品に賭ける意気込みを感じ取ることができる。

また企画展『水木しげると女房のゲゲゲな時代』も開催中だ。貸本漫画を描いていた売れない時代の水木家の居間を再現しており、当時水木が愛用していた品々を展示している。

このように水木しげる記念館は、画業60周年を迎えた水木しげるの、それぞれの時代の作品にスポットを当てており、お子様からご年配の方まで幅広いファンの方々楽しんでいただける施設となっている。



水木しげるの大作『妖怪道五十三次』

水木しげる記念館

〒684-0025 鳥取県境港市本町5番地(本町アーケード通り)
TEL 0859-42-2171

休館日●年中無休

入館料●一般700円、中高生500円、小学生300円
(※団体20名以上1名につき100円引)

企画展 '10～'11

Exhibition Schedule

[特集展]

発掘！ 出雲平野の弥生時代

調査研究成果の最前線

2010.12/17 金 ⇨ 2011.2/14 月

斐伊川下流、出雲平野の弥生時代遺跡を紹介。大量に出土した弥生時代末期の土器の出土状況を再現するとともに、豊富な渡来系遺物、各地との交流を示す遺物をまとめて展示します。



2012年は、「古事記」が編纂されて1300年目の記念の年。

2011年春

「神々の国しまね～古事記1300年～」が始まります。

古事記 編纂1300年 企画展

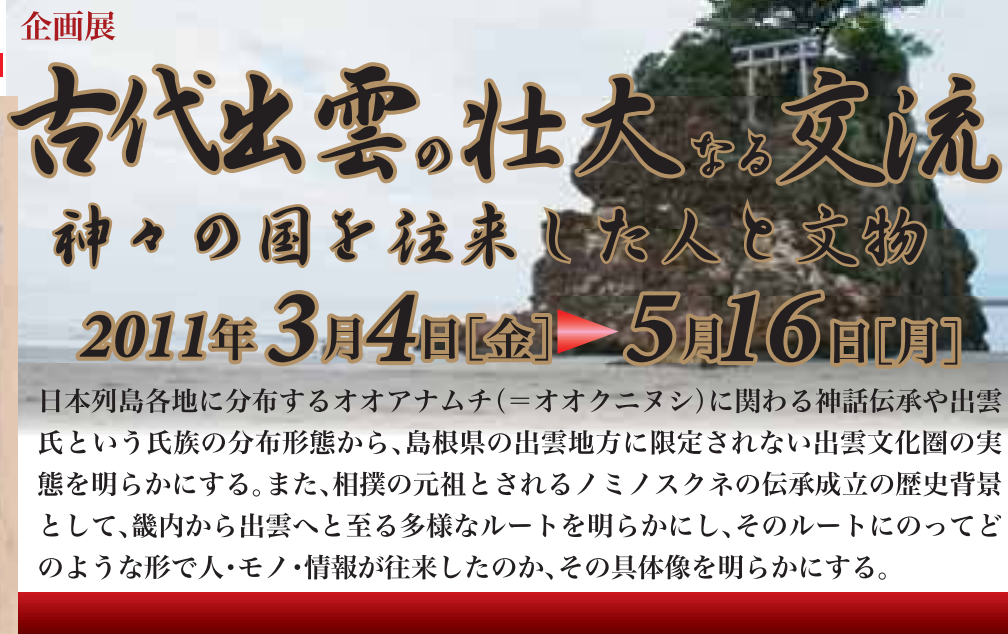
712年～2012年

古代出雲の壮大なる交流

神々の国を往来した人と文物

2011年3月4日[金] ▶ 5月16日[月]

日本列島各地に分布するオオアナムチ(=オオクニヌシ)に関わる神話伝承や出雲氏という氏族の分布形態から、鳥根県の出雲地方に限定されない出雲文化圏の実態を明らかにする。また、相撲の元祖とされるノミノスクネの伝承成立の歴史背景として、畿内から出雲へと至る多様なルートを明らかにし、そのルートによってどのような形で人・モノ・情報が往来したのか、その具体像を明らかにする。



特別展

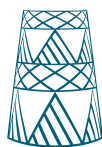
観音巡礼

中国路の古寺と仏像

2011.7.22[金] - 9.25[日]

平成23年に開創30周年を迎える、中国5県の寺院が組織する中国観音霊場会の全面的協力を得て、加盟寺院を紹介すると共に、仏像や絵画など寺宝の数々を一堂に公開します。

発行/平成22年9月



島根県立古代出雲歴史博物館
Shimane Museum of Ancient Izumo

〒699-0701 島根県出雲市大社町杵築東99-4
TEL.0853-53-8600(代) FAX.0853-53-5350
URL: <http://www.izm.ed.jp> E-mail: contact@izm.ed.jp
開館時間 9:00～18:00(11月～2月は、9:00～17:00)



マスコットキャラクター
雲太くん



マスコットキャラクター
出雲ちゃん